# 黄楊の櫛（一　幕）

岡田八千代

**人　物**

豐之助　主人（三十三歳）
藤　平　父親（六十二歳）
おつな　去りたる妻（二十五歳）
おさつ　使ひに來る婆（六十歳）
お　袖　近所の娘（十七歳）
爲　吉　小僧（十四五歳）

**時**

夏

**場所**

東京

とある大通を反れたる横町。上手に塀に圍まれたる藏の裏面を見せ、藏に添ひて細き露路あり、下手同じく塀にて見切り、通路とせる露路あり。最中にのれんを下げたる櫛製造所の店先の體。店の下手及上手の一部に棚を釣り、製造されたる櫛を入れたる箱、及び木材などを置く。下手の隅に窓あり。窓のもとに臺を置き、櫛をす、く、道具を置き座布團を据ゑあり。すべて棚の前板の間。其外疊。奥とのしきりに細き硝子の入りたる障子を立つ。その向ふ臺所に續きたる茶の間の心。軒先に祭の提灯を下ぐ。店の端に烟草盆を置きて主人豐之助、苦みばしつたる好男子、さつぱりと小意氣な浴衣にて烟草を呑み居る。店先に小僧爲吉、腰かけゐる。遠く祭の太鼓の音。幕開く。

爲吉　（立ちかゝりて）ぢや、豐さん。鬢櫛の方は明後日（あさつて）までだよ。祭で氣の毒だけどもつて大旦那が言ふんだから、いゝかい。お嫁さんの方もいゝかい。鬢櫛は

明後日まで。お嫁さんは今夜だ。忘れずに連れて來ておくれよ。

豐之助　（考え込みて）よし〳〵、分つてるよ。

爲吉　ぢやきつと明後日までだよ。お内儀さんも言つてたア。如何して豐さんともあらうものが、三十三枚の櫛なんか造らへたんだらうつて、如何して造へたんだい？　豐さん。

豐之助　（紙に包みたる黄楊の櫛を出して見ながら）おれだつてわざ〳〵造へた譯ぢやないんだからな。

爲吉　なぜ三十三枚齒のある櫛は縁起が惡いんだい？

豐之助　知らねえな。なんでも此齒をかうして指の先で撫でながら、年越の晩に四ッ角に立つて願ふと、どんな呪ひでも利くといふんだ。まァ昔者の迷信さ。

爲吉　へエ。ぢやもし、其時に己らなら、己らが、もし今晩豐さんなら豐さんを殺してしまひたいと言つて呪へば豐さんが死ぬんだね。

豐之助　（櫛の齒を上にして指先にて撫でゐたるが、フト止めて）縁起でもねえ事いふない。もうお前は歸えんなよ。油賣つてると旦那に叱られるぞ。

爲吉　へイ〳〵。ぢや、明後日と今夜だよ。あばよ。

（爲吉走け出して、下手の露路より去る。）

豐之助　（ぢつと考へて櫛の齒を數へる）ちよッ、如何したつて三十三枚だ。今迄にこんなに氣に入つた出來の櫛はねえのになア。

（二階にて烟草をはたく音す。）

豐之助　ちよッ。まだ話して居やがら。

（櫛を紙に包みて懐へ入れ、奥のしきりの障子を開け二階を見上げる心にて。）

豐之助　おい、お父つさん。（間をおきて）お父つさん。

父親　（二階にて）オイよ。

豐之助　幾ら言つたつて同じ事だ。好い加減にして下りて來ねえ。

父親　あゝ今、丁度下りようと思つてる處だ。

豐之助　（店へ歸りて）此暑いのに。いつ迄居るんだらうなア。なんだつてあんな奴をよこしやアがるんだらう。

父親　（柔和なる顏立。奥より出でゝ）豐や、おさつさんはお歸んなさるさうだよ。

おさつ　（卑しき顏。下品なるつくり、父親に續いて店へ來ながら）ぢやア、如何してもおつなさんにはもう用は無いと言ふんですね。

父親　幾度も申しました通り。もうあつし共は、男二人で充分用は足りるんだから……。

おさつ　（ぢろりと豐之助を見て）豐さんも男らしく無いね。お前さんおつなさんに約束したのをお忘れかい？

父親　（豐之助のムツとして何をか言はんとするを押へて）夫は最前も（豐之助を指して）是から申しました通り、いづれ亦店でも持つたら呼ばうと言ひましたのは、如何にもあの女が出て行かないから申した方便でしてな。例へかうして今度型ばかりの店を持つたのも、みんなお店のおかげなんですから、今度また嫁でもとるにはお店の相談を借りねばならず。お店ぢや、おつなでは承知をしませんのでな。どうぞまアお前さんから、あの子にも宜しく言つて下さいよ。

おさつ　ぢや詰り、今度はお店で承知しないからおつなさんを呼びかへされないと言ふんですね。へゝエ、夫で分りましたよ。ぢやア今度はお店のお世話でお嫁さんが出來るといふ譯なんですね。へゝエ。

豐之助　（堪へかねて）おさつさん。好い加減にして呉んねえな。だれが嫁を貰ふと言つたんだ。

おさつ　とぼけても不可ませんよ。最前お前さんお店の爲どんがお嫁さんを如何とか言つてたぢやないか。年はとつてゝもね、耳は近いんだよ。

父親　あれはお前さん……。

豐之助　（遮りて）お父さん、こんな奴にうつかり言つて、またお店の迷惑になると不可ない。うつちやときねえよ。

父親　さうだな。

おさつ　どうせ私は鐵棒引さ、だがね。賴まれた事は達さなきやならないんだよ。ねえ。お前さん達ァおつなさんの方は一體如何するんだよ。

父親　とにかく、よく亦倅とも相談をするから。

豐之助　相談も何もねえよ。親父の身體に手を上げるやうな女房は己れは持てねえんだ。

父親　なアに夫やあつしも我慢するがね。その爲に年中倅に氣を揉ませるのも氣の毒だし、自然お店の方へも不義理になるし、まアどうぞ宜しく今度はお斷り申しますよ。

おさつ　それやおつなさんもね。お父さんに向つて手を出したのは全く自分が惡い、夫もつまりはお前さんに……。

豐之助　（首をふりて）聞かねえ、聞かねえ。言譯は聞かねえよ。たとへ親父が呼んでくれと言つたつて己らは嫌なんだ。なんだつてあゝもおつなは親父につらく當るんだらうと思つて、己れは恨んでゐるんだからな。

おさつ　夫はおつなさんも全く後悔してるんだから、ねえ豐さん。おつなさんもあゝして苦勞のしつぱなしでおさらばぢや可哀さうぢやないか。ねえ。お前さんも今度はかうしてお店の近所へ店らしい店も持つた事だし、あの子も例へ今度は直ぐ出されても好い。一日でも好いからこの店へ坐つてお女房さんらしくして見たいつて言ふんだからね。ねえ、今度惡い事がありや私だつて利きやしないよ。うんとあの子をとつちめてやるつもりなんだからね。

豐之助　（つとめておさつの言葉を耳に入れまじとして）何てたつて不可ねえよ。お前の保證ももう何度だか知れねえんだ。この店だつて彼奴が居なければこそ持てたんだ。どうしたつて己れは親父を酷い目に合せるやうな女房は持てねえんだ。

おさつ　ぢやお前さんはお父さんに氣に入らない嫁なら、何度でも出すつもりかえ。

豐之助　如何だつて好いぢやねえか。

おさつ　へエ。へエ。どうせ私は世話燒ばゝアだよ。だけどもね。誰の爲でもなしさ。

お前さんだつておつなさんにや惚れてるぢやないか。

豐之助　（立かゝりて）なんだと？

おさつ　何も怒らなくつたつて好いぢやないか。へゝゝ。ねえ大抵な事なら入れておやりよ。ねえおとつさん。

豐之助　駄目だよ。己れも二度や三度の中は我慢をしたんだ。親父にも詫まつて歸つて貰ひもしたんだ。そりや女房が居なけりや、やつぱり親父に使歩きをさせなきやならずよ、己れの忙しい時にやア飯の世話までもして貰はなきやならねえんだ。夫でも濟まねえと思ふから、まア始めの中は詫びてくりや家へも入れてやつたんだが、如何してお前、あの女の疳癪と來た日にや、他人の思ふやうなもんぢやねえんだからね。少しばかり己れと親父とがこそ〳〵話しをしたからつて、お前。突然親父を向うへ突き飛ばしてよ。見ねえな。（親父の肱をまくりて繃帶を見せ）いまだに癒りやしねえんだぜ、老人だから堪りやしねえやな。うつかり向ふへ倒れる拍子に其處に出てた包丁の處へ肱を突いたのよ。そりやアついだと言へばついよ。けれどもお前、假にも亭主の親だと言ふ心掛がありやこんな事にはなりやしねえんだ。己らは如何しても親に怪我をさせるやうな女ア家に入れる事は出來ねえんだよ。

おさつ　ぢやア如何しても駄目だつて言ふんだね。

豐之助　うるせえな。もう默つて歸りやアがれ。

父親　まア、さうお前もぎだうに言ふもんぢやない。まアおさつさんも腹を立てないで一まづ歸つておくんなさい。あつしはナニ、倅に氣に入つてる嫁なら、ちつとやそつと怪我位したつて構ひませんがね。いろ〳〵えも外に苦勞もある事てすから、とにかく又氣の向いたやうな日にでも話しに來ておくんなさい。

おさつ　ぢやア豐さん、今度は如何しても家へ入れない覺悟なんだね。

豐之助　さうだ。その覺悟だ。

おさつ　ぢやアその通りあの子にも言ふよ。

父親　然しなおさつさん。亦いつかのやうに刄物ざんまいでもされちや困るからね。なんとか上手に・・・

おさつ　豐さん。立派な覺悟だね。もう賴んだつてあの子は歸さないよ。

豐之助　（苦しげに）大きにお世話だ。手前の娘ぢやあるめえし。早く歸れ。手前のお蔭で祭だつてえのにさんざんだ。

おさつ　へエ〳〵どうもおやかましう。覺えてるがいゝや。

（おさつ、憎々しげにいひて下手露路の方へ行きかけ。）

おさつ　ぢやアおつなさんにやもう嫁さんの後口が定つたからつて言ひませうよ。

父親　おさつさん。そんな事を言つちや……

豐之助　いゝやな。お父さんうつちやときねえな。

おさつ　豐さん。大層强つ氣になつたもんだね、へゝゝ。

（露路口より去る。）

豐之助　お父さんお前さぞ厭だつたらう！　さつぱりと湯にでも這入つて來ねえ。

（豐之助の顏、やゝ色蒼ざめて身體も勞れたる如く見ゆ。）

父親　なアに。己らは後で行くから、お前行つて來な。どうせ今日は休みだ。己らは横にでもなつた方が勝手だから。

豐之助　（心惡しきを隱すがごとく元氣よく）さうか。ぢや、今の中一風呂浴びて來ようか。

父親　（豐之助の顏色に心づきて）お前、なんだか顏色が惡いぜ。如何かしたのか？

豐之助　なアに。少しばかり肩が凝つてる丈だ。ぢや一寸行つて來ら。

（立ち上がりて再び坐り。）

豐之助　ねえお父さん。

父親　なんだ。

豐之助　あゝは言つてやつたけれどもな。又あんな女だから、いつもの傳で、自分で文句を言ひに來(こ)ねえとも限らねえからな。もし己らの留守にでもやつて來たら決して弱い氣を出しなさんなよ。よくお前から言ひきかして歸してくんねえ。もしお前がを氣を弱くして此處へ置くやうな事があれば、今度は己らが出て行くから。いゝかい！　此上お前、亂暴されて見ねえな。己らア兄貴や姉さんに顏が向けられねえんだからな。

父親　よし〳〵大丈夫だ。如何してお前の苦勞するのを見ちや、己れだつてそんなに氣を弱くしちやアゐられやしねえ。だがな豐、お前氣を惡くしちや困るがな、お前、もしもあの女が氣に入つてるなら、家へ入れてやつた方がいゝよ。よくいひ聞かしてやりやア分らねえ女でもないんだからな。なア豐。己らはもう老人(としより)だ。ちつとやそつと邪魔にされたつて當前だと斷念(あき)らめて居るんだから、なア、眞實(ほんたう)の總領にだつて娘にだつて邪魔にされぬいた己だ。末ッ子のお前がこんなに孝行にしてくれるんだもの。その嫁に少しぐらゐ邪魔にされたつて己らは決してお前を何とも思やしねえ。決して思やしねえから、少しでもあの女が可哀さうだと思ふなら、も一度呼びかへしておやり、よく〳〵不可なけりや、己らは何處へでも行くから。

豐之助　お父さん後生だ。お前賴むからそんな事は言はねえでくんな。己らもしお前に出てゞも行かれた日にや。そオら見ろ。立派な口を利いて引取つたくせをしやがつて、親に怪我をさせてまでも女にのろけて居やアがるときつと彼奴等(あいつら)は言ふんだ。それぢやお前、威張つて引とつた己れの顏の立て所がねえから、ねえお父さん。もうそんな事は云はねえで家に居ておくれ、賴むから、己ら、おつななんかに、何で未練があるもんかな。お父さんがもし入れでもすりや、己らは全く出て行つちまふ積りだから。

父親　よし〳〵。ぢやア、まア面倒でもお前に死水はとつて貰はうよ。

豐之助　緣起でもねえ事を言ひなさんな。ぢやア、己らア行つて來るから氣をつけてゝ

吳んねえ。まさかもう來もしねえと思ふけれども、いつかのやうな事もあるから、いゝかい、しつかりしてゝ吳んねえよ。

父親　大丈夫だ。心配しねえで行つて來な。

豐之助　ぢや急いで行つて來ら。（奥へ行きかけてまた立止り）それから袖ちやんがお母親（ふくろ）さんと來るかも知れねえから。もし來たら待たしといて吳んねえ。今夜お店へ一所に行く筈だから。

父親　（嬉しげに）ぢやア、いよ〳〵上手（うま）く行くのかな？

豐之助　うむ。もう大體の話は定つてるんだがね。大旦那のお内儀さんが一遍本人を見てえつて言ふもんだから、本人には夫（それ）と言はずにお店でお祭の餘興があるつて事で呼ぶ筈になつてるんだ。

父親　さうか。夫や好かつた。何でも清元の御師匠さんとかで若旦那はあの子を見染めたんだつてな。お母親（ふくろ）さんは堅いし、兄さんはしつかりものだし、お店にや好いお嫁さんだ。

豐之助　そうよ。若旦那もあれでなか〳〵今時の學問もあつて商賣だつて拔目がねえんだから、袖ちやんも幸福者（しあはせもの）さ、ぢや行つて來ら、己ら水口（みづぐち）を閉めて、裏から出てゆくからな。店の方を賴んだぜ。

父親　あゝ、ゆつくり行つて來な。

（豐之助奥へ入る、やがて水口の締る音す。暫くして下手露路口よりお袖。島田に結ひて人品なる娘風。よそ行のなりにてめりんすの風呂敷包を持つて出づ。）

お袖　（店を覗きて）をぢさん。をぢさん。

父親　（寢轉びて居たるが起き上りて）よう、お袖ちゃん。これは綺麗だ。

お袖　いやなをぢさん。

父親　まアお上りなさい。お母（つか）さんは？

お袖　（店先へ腰かけて）今ね、お客があるから一足先へ豐さん處まで行けつていふのよ。

父親　おや〳〵。さうですかい。まアお上り。

お袖　此處で澤山。今ね表で豐さんに逢つたわ。

父親　あゝ一寸湯に行きましたよ。

お袖　（心細げに）ねえをぢさん。豐さんのお店つてどんな處？　大きいの？

父親　さア大して廣くもないがね。お庭なんかあつて。なか〳〵凝つてますよ。

お袖　さう？　大旦那だのお内儀さんだの。若旦那だの、番頭さんだの、種々な人が居るでせうねえ。

父親　そりや居ますよ。今日はお客をするんですからね。

お袖　でも私、餘り餘處の家へ行きつけないから。いやだわ。誰も居ないと好いんだけれども……

父親　アハヽヽヽヽ、それぢやお客様が困りまさ。

お袖　私は困らないわ。

父親　アハヽヽヽヽ。

お袖　でもね。お芝居があるんですつてね。番頭さんや小僧さんの。

父親　さうかな。あつしやア知りませんよ。お袖ちやんは芝居は好きですかい？

お袖　えゝ好きよ。でもあたし、めつたに見た事は無いの。夫も歌舞伎座つきりか知らないのよ。豐さんのお女房さんの事をみんなが新派の誰とかに似てるつて言ふけども、あたし新派は知らないわ。

父親　ハヽヽ、さうですかね。だがお前さんは大變清元が上手だつてな。ひとつ今度をぢさんにも聞かしておくんなさいよ。

お袖　ちつとも上手かないわ。お店の若旦那はそりや上手！

父親　あつしやアお店の若旦那にはまだ一度もお目にかゝつた事は爲いが、どんな方だな？

お袖　どんな方つて、矢張り男の人だわ。

父親　アハヽヽ、女の若旦那があるかな。

お袖　いや、あたし、をぢさんは揚足ばかり取るんですもの。

父親　そんなに脹れちや、お嫁に貰ひ手がなくなりますぜ。

お袖　いゝわなくつたつて。

父親　夫では一生兄（にい）さんの厄介者かな。

お袖　一生でも二生でも兄さんは厄介なんかにしやしないわ。

父親　兄さんはしないでも、今にお嫁さんが來りやお袖ちやんは鬼千匹だからな。きつと厄介者だ。

お袖　あらまだ兄さんは學校へ行つてるぢやありませんか。お嫁さんなんか貰つちや可笑しいわ。

（上手の細き露路よりおつな、銀杏がへし、意氣な浴衣がけにて黒繻子の帯の間に紅絹に包みたる剃刀を差して豐之助の店を密かに覗ふ。）

父親　アハヽ。今は貰はなくてももう直きでさ。

お袖　直きぢやないわ。

父親　まだだ〳〵と思つて居たお前さんでももうお嫁さんだからな。

（おつなやゝ氣色をかへて聽耳を立つ。）

お袖　あたしだつてお嫁さんなんかにならないわ。

父親　アハヽヽヽ。まアお上り、其中には豐も歸るし、お母（つか）さんも見えやうから。二階へ行つてお茶でも呑まう、大分蒸して來たから、二階へお出で、少しは涼しいから。

お袖　お母さんは如何したんでせう。

父親　直きに來るさ。さア、まア上つておいでなさい。

（お袖風呂敷包を持ち、父親に續いて二階へ上る心にて奥へ入る。おつな。そつと露路を出て嫉ましげに奥を覗く。下手に足音す。おつな上手の露路へ隱る。下手の露路より豐之助。湯上りの心にて石鹸と、手拭とを持ちて出づ。）

豐之助　（店を見て）お父(とつ)さん。今歸つたよ。（お袖の下駄を見て）袖ちやん來てるんですかい？

（返事なし。豐之助店先に腰を下す。おつな出づ。）

おつな　（聲を忍びて）豐さん。

（豐之助振り返り。ハツとして立上る。）

おつな　お前さん氣が變つたのかい？

豐之助　（店を見返りておつなの側へ寄り）まア待つてくれ。

（と豐之助の店へ上らむとするをおつな押へる。）

おつな　お前逃げるのかい？

豐之助　（強く）逃げやしねえやな。

（おつな手を離す。豐之助奥を覗きて再び店先へ下りる。）

豐之助　親父は二階だ。

おつな　二人は二階とお言ひな。お前さんも優しいお嫁さんが定つておめでたうございますよ。

（おつな口惜しげに涙をぬぐふ。）

豐之助　詰らねえ事を言ふぢやねえか。いつ己らが女房(かゝあ)なんぞを貰つたんだ。

おつな　澤山お隱しよ。どうせお袖ちやんはあたしより年は若し、綺麗なんだ。

豐之助　靜かに言ひねえ。そんな馬鹿な事を言ふもんぢやありやしない。ありやお店の若旦那の處へ行く人ぢやねえか。

おつな　馬鹿におしでないよ。お店ともあるべきものが、あんな處の娘を貰ふもんかね。

豐之助　たとへどんな處の娘だらうが氣に入りや貰はねえとは限りやしねえんだ。やつかみも大概（てえげえ）にしろ。

おつな　あゝ私（あたし）はどうせやつかみ性だよ。そんな事で私をごまかさうたつて駄目だよ。今夜お前さんは袖ちやんを連れてお店へ行くんだらう。なんてつたつて知つてるよ。お店からもお嫁さんを連れて來いつて向ひが來たつてぢやないか。

豐之助　夫がお前（めえ）の思ひ違ひなんだ。

おつな　思ひ違ひなものか。さつきも聞いてりやア、お父さんも嫁のなんのつて私は口惜しいよ。お前さんはもうほんとに私を捨てるつもりなんかい？

豐之助　己れの心はお前も知つてる筈ぢやねえか。

おつな　だつてお前さんは、今度こそは如何しても入れない積りだつてをばさんに言つてよこしたぢやないか。

豐之助　お前。また何だつてあんな者を遣（よこ）すんだな。夫ほどお前早く話が定めてえのか？

おつな　（やゝ安堵せるごとく）さう言ふ譯ぢやないんだけれどもね。お前さんのやうな男にや。何かしら私を思ひ出すやうなものを見せて置かなきや、氣が長いんだもの。心配で心配でなりやしない。今度だつて、きつと何とかするからつてお言ひだから歸つたんだよ。もう三月にもなるのに何とも言つて來ちや吳れないんだもの。お負けに私に内證で家中で越して終（しま）ふんだもの。

豐之助　そいつア仕方が無（ねえ）やな。お店からは店の傍へ來いつて言ふし、親父も彼處は越してえつて言ふんだから。

おつな　ぢやアお前さんはお店とお父さんの言ふ事さへ聞いてりや好いんだね。

豐之助　さう言ふ譯ぢやねえけども、親父の氣に染まねえ家に片時（かたとき）だつて住んでりや不孝ぢやねえか。

おつな　ぢやア若し、私が此處の家を探し出す事が出來なくても平氣なんだね。

豐之助　さうぢやねえけれどもさ。だつてお前他國へでも越しやアしめえし目と鼻の先きぢやねえか。

おつな　だつてこんな露路の中ぢや運が惡けりや探し當てる事は出來ないかもしれないぢやないか。

（おつな悲しげに涙をこぼす。）

豐之助　だつたつてお前親父が……

おつな　お前さんは二言目（ふたことめ）には親父親父つて言ふけれどもね。お前さんはそんなにも親が大切なのかい。自分の好きな女房を振り捨てゝもあのお父さんが夫ほどまでに大切なのかい。

豐之助　さうだ。大切だ。己ら自分の身を捨てゝもあの親父は大切なんだよ。己らは何故お前が己れの萬分の一も親父の事を思つてくれねえのかと思つて、口惜しくつて口惜しくつてなりやしねえ。

（豐之助涙を含みておつなの顔を見る。）

おつな　あゝ何故。あたしにはお前さんのやうな優しい心を持つ事が出來ないんだらうね。何でもない事ぢやないか。あの袖ちやんのやうにおとなしくやりや好いんだもの。

豐之助　さうだ。さうさへすりや好いんだ。

おつな　（何か想像するやうに）あの、何と言はれても、どんな氣に染まない事があつても、ぢつとして耳を閉（ふさ）いで……あゝ私には小ぢれたくつて出來やしない。

豐之助　する氣が無えから出來ねえんだ。己らだつてお前に袖ちやん位の優しい心がけがありや何も好んで別れるたア言やアしねえんだ。

おつな　ぢやお前さんは私を嫌つてるんぢや無いんだね。

豐之助　當前(あたりめえ)ぢやねえか。

おつな　あゝ嬉しい。ぢやアお父さんの前だけであんな事ををばさんに言つたんだね。

豐之助　分りきつてるぢやねえか。

おつな　ぢやア、私と此處を逃げておくれ。

豐之助　（驚きて）馬鹿な事を言ふな。親を捨てゝ女房と家を出られるもんか。考へても見ろ。

おつな　だつてお前さん。此儘にしちや。きつとお父さんは袖ちやんをお嫁にすると言ふだらうぢやないか。

豐之助　何を言つてるんだな。ありやお店の……

おつな　嘘だよ。あんな優しい人があるのにと思つて、きつとお父さんは私を憎むだらう。

豐之助　何も袖ちやんが特別優しい譯ぢやありやしねえんだ。お前さへ當前(あたりめえ)の女になつてくれりや好いんだ。

おつな　今迄にだつて何度も何度もあたしは當前の女になれるつもりで歸つては來るんだけれ共。なぜ外の女は私よりも優しいんだか。あたしはもう自分で自分に愛想がつきて居るんだよ。さうかと言つて、如何してもお前さんに別れちやア。あたしは淋しくつて淋しくつて、暮しちや行かれないんだから、お願ひだお金丈の事なら、私が又師匠をするなり何なりしてお父さんの世話はするから。さア直ぐに逃げておくれ。

豐之助　そんな事は出來やしねえよ。

おつな　それぢやア私は如何したら好いんだらうねえ。

豐之助　親父の言ふ事なら、どんな事でもするやうな女にならなくちや、とても添つて行く事は出來ねえのだ。

おつな　ぢやアお前さんは？……

（おつな、きつと豐之助の顔を見る。二階にてお袖の聲す。豐之助無理におつなを連れて上手露路に入る。お袖。奥より出づ。父親も續く。）

お袖　あたし見て來るわ。御母(おつか)さん如何したんでせう。

父親　うむ。さうだな。豐も如何したのか。今聲がしたやうだつたがな。豐や、……返つたのかな。近處ぢやみんな祭に行つてしまつたし……豐や、豐ぢやねえのかな。

お袖　石鹸も手拭もあるのになんだか變ねえ。

（豐之助吉上手露路より出づ。おつな忍ぶ。）

父親　なんだお前、そんな處に居たのか。何をしてたんだ。

豐之助　なアに溝板が外(はづ)れさうになつてたから、又誰か落ちでもすると不可ねえと思つてよ。

父親　さうか。（豐之助の顔を見て）したがお前、やつぱり顔色が惡いぜ、如何したんだらう？

豐之助　なアに、どうもしやあしねえがどうも肩が凝つて肩が凝つてしやうがねえのさ。

父親　其奴は不可ねえな。餘り氣分が惡いやうぢやお店へも行けめえな。

お袖　ぢやア私達も止しませうか。

豐之助　其奴ア不可ねえ。袖ちやんの爲に行くんですからね。ぢや斯うしませう濟まねえけれ共お父さんは己らの代理をして貰はうね、袖ちやん好いでせう？

お袖　でもをぢさんに惡かなくつて？

父親　なアにあつしやア構ひませんがね。

豐之助　ぢやア賴まア。別に面倒な事はねえから、よく己らの事を言つて、急に斯う斯うだからつてね。尤も直りしだいに己らも店を閉(し)めて行くから、袖ちやんの御母さんを誘つて、兎も角も出かけて吳んねえ。

父親　ぢやアさうしようかな。然しお前一人で大丈夫(でえぢやうぶ)か。

豐之助　大した事はありやアしねえんだ。

父親　夫ぢやア一寸羽織を引かけて來よう。

（父親奥へ入る。）

豐之助　袖ちやん。お店へ行つたら、お内儀（かあ）さんへどうぞ宜しく言つておくんなさい。どんな人が來て居ないとも限らないから。餘り笑つたりなんかしちや不可ませんぜ。

お袖　あらさう？……でもあたし、もし笑つたら如何しませう。

豐之助　ハハハ、只笑ふ位構ひませんよ。

（おつな覗く。奥より父親出づ。おつな再び忍ぶ。父親奥より下駄を持ち出す。豐之助父親の下駄を取つて並べてやる。）

父親　どうも憚り。ぢや袖ちやん出かけませう。お前暫く横にでもなつて居ねえ。ゆつくり休んで夫から來ると可い。

豐之助　うむ、直きに行くから心配しないで行つてゝ呉んねえ。通りが随分人が出てるから、氣を付けてつてお呉れ、樽みこしが危ねえからな。

父親　よし〳〵。

お袖　ぢや、お先へ。

父親　早く横になつた方が好いぜ。

（二人下手露路より去る。上手露路よりおつな出づ。）

おつな　如何してあゝあの人達は仲よく出來るんだらうねえ。憎らしい、石でも投（はふ）つてやり度いよ。

豐之助　馬鹿な事をしちや不可ねえよ。その娘（こ）に怪我でもさしたら如何するんだ。

おつな　だつて餘（あんま）りいま〳〵しいんだもの。

豐之助　いま〳〵しいのは手前の心ぢやねえか。如何してお前はさう氣が荒くなつたん

だらうなア。

おつな　あたしの氣の荒くなつたのはお前さんの爲だよ。

豐之助　なんだと？己らがお前の氣を荒くしたんだつて？

おつな　あゝさうぢやないか。今更になつて叱言(こごと)を言ふ位なら、なぜ始めつからやかましく言つて呉れなかつたの？　お父さんが來る前まではお前さんあたしに向つて氣が荒いなんて言つた事は無いぢやないか。あたしだつてこんなに氣のいら〳〵した女ぢやなかつたんだよ。氣が荒くなつたと言ふのならお前さんがさしたのだよ。あたしはお父さんが來る前までは少しも氣兼も入らなかつたし、思ふやうな事を云つて思ふやうな事をして居たのだよ。夫でもお前さんはいつでも機嫌よく叱言なんか言つた事はなかつたぢやないか。夫が、お父さんが來てからといふものは、あゝしちや不可ない、かうしちや不可ないつて。叱言は言ふし機嫌は惡し。朝から晩までお父さんお父さんで、あたしはもう居るんだか居ないんだか知れなくなつて終つたんだもの。たまにゆる〳〵話しがしたいと思つても、お父さんが一寸咳でもすりや、お前さんは直ぐ飛んでつて終ふんだもの。一處に行き度い處があつても、いつでもあのお父さんの爲めに駄目になつてしまふんだもの。……あたしはあの人の來るまでは一度もお前さんに押へつけられた事はないのに、あの人が來てからと言ふものは、あたしはいつが日にも自分が自分らしいと思つた事は一度もありやしない。いつでもいつでも小さくばかりされて居るんだもの。あたしは今更になつてそんなにされる位ならはじめつから押へつけて居て貰ひたかつたんだよ。あたしはお前さんの處へ來るまでは酒呑みの親父と、意地の惡い継母(まゝはゝ)にかゝつて居て、一日だつて一分だつて樂にした事はありやしない。年が年中くだと叱言の間に挾まつて小さく小さくなつて居たんだよ。夫がお前さんの處へ来てからは、急に大きくなつたやうな氣がしたのだ。全(まる)で、寒い荒野(あれの)から、好い心持に暖かい綺麗な野原にでも來たやうな氣がしたんだよ。たまに塞い處へでも歸されでもする事なら、夫も運だと思つて絶念(あき)らめられない私でも無かつたのに、さんざん心持の好い野原に置いて置いてもう寒い味なんか忘れてしまつた時分に、また急に其處を追

つぱらはうとしたつて、それは無理だよ。あたしは如何かしてお前さんと一處に居ようと思つたから、泣いても見た、怒つても見た。さうしてお父さんからお前さんを取戻さうとしたけれども、お前さんはお父さんの方ばかり見てゝ振り向いても呉れない。あたしは如何かしてお父さんが出て行つてくれゝば好いと思つては、思入れお父さんに辛く當つて見た。けれ共、お父さんは少しもあたしに逆らつては呉れないんだもの。あたしもうぢれつたくてぢれつたくつて、ねえお前さん、それもこれもみんなお前さんの心を取り戻さうと思つたからした事だよ。だものあたしは少しも惡いとは思つて居ない、夫だのにお前さんは少しもあたしの心を察してくれないで、あたしばかりを責めるのだもの。そんなにあたしを責めたければ、何故はじめからあたしを責めて呉れなかつたの？！　……あのお父さんが居さへしなければこんな事になりはしなかつたのだよ、だからあたしはお父さんが憎らしくてたまらない。あたしは誰にも彼にもみんなあのお父さんをいぢめさしてやり度い、優しくなんかして貰ひたくないのだよ……

（おつな、急に聲を放つて泣く。）

豐之助　お前のいふ事にも理窟はある。けれども、お前は自分の言ふ事ばかりを耳に入れて人の言ふ事には少しも身を入れてくれないのだ。なぜさうお前は片寄つた心ばかりを持つて居るのだ。お前は少しもお父さんを如何いふ人だと思つて見た事もねえんだ。

おつな　少しも無いよ。お前さんを取つてしまつたやうな人に優しくする譯が無いんだもの。

豐之助　又さう言ふ分らねえ事を言ふ。お前がいつまでもさう言ふ心で居るんぢや、己らはいつまでゝもお前と一處になる事は出來ねえ。

おつな　お前さんは如何してお父さんが來てからつてもの、そんなに強つ氣になつてしまつたの？　どうしてもあたしにや、お前さんが前のやうにあたしの事を思つ

てるとは思はれないよ。

豐之助　お前(めえ)は己らの心をみぢんも察しちやくれねえのだ。分らねえのだ。

おつな　あゝ分らないよ。分らない。分らない。

（おつな。首を激しく振つて泣く。）

豐之助　しッ。誰か來る。來い。

（二人再び上手の露路へ隱る。下手の露路より小僧爲吉出づ。）

爲吉　（店へ來て）ヘイ御免。豐さん。豐さんお内儀(かみ)さんがね、待つてますよ、早く來て下さいつて。豐さん、豐さん。（店へ手を突きて奥を覗き紙に包みたる以前の櫛を拾ふ）さつきの櫛だな。三十三枚か。（思ひ出したやうに）豐さんは居ませんか。死んだんですかい。いやになつちまふなア。お嫁さんを早く連れて來て下さいつて待つてますよ。……（店へ上りて奥の障子を開けて見る）誰も居ないや。ぢや出かけたんだらう。やれ〳〵御苦勞さまだ。

（櫛を店へ放り出して下手へ去る。暫くして豐之助顔色蒼ざめて上手露路より出づ。おつな其袂に縋り居る。）

豐之助　話して呉れ。もうお店へ行かなきやならないんだ。

おつな　いやだ〳〵。袖ちやんにまで馬鹿にされるのは嫌だ。

豐之助　なぜお前(めえ)はさう分らねえんだらう。ありや若旦那のお嫁さんになる人だつてあんなに言つたぢやねえか。嫉妬(やきもち)も好い加減にしねえな。放せ。

（豐之助振り拂ふ。おつな轉びながらなほ袂を離さず。）

おつな　豐さん。後世だ詫まるから今日はお店へ行かないでお呉れ。今日丈行かないでゝ呉れゝば、あたしきつと優しくして見せる。死ぬ苦しみをしても優しくするから……。

豐之助　夫はお前の奥の手だ。夫にやアもう幾度も騙されて居るんだ駄目だ。

おつな　そんな事を言はないで豐さん。詫まるから詫まるから。

（大地へ頭をつける。）

豐之助　おつな。そんな事はしねえで呉れ。己は情けなくなつて如何する事も出來やしねえ。

（豐之助勞れはてゝ店へ腰を下す。ふと其處にありたる櫛をとりて。）

豐之助　さアえで髪でも梳いて今日丈は歸つてくれ。さうしてお前もかう云ふ縁だと絶年めて、お前が己れを思つてるなら、どうぞ己れが迎ひに行くまで待つてゝ呉れ。さうだ。この櫛は近頃になく己れの氣に入つた出來なんだ。えをお前に預けて置くから。な。夫を己れだと思つて大切にしてゝ呉んな。え、おつな。

おつな　なんだいこんな櫛。

豐之助　（くわつとして）何だと。

（豐之助。おつなの腕を掴む。）

おつな　（泣きながら）いやだ〳〵あたしは。今日は死んでも歸らない。

豐之助　死んでも？

おつな　あゝ！　覺悟はして來たんだよ。

豐之助　（思ひ直して、やさしく）な、賴むから今日は歸つて時を待つてゝ呉れ。もう己れはお前に無理にお父さんの守をして呉れとは賴まねえ。夫を無理にさせよ

うとしたのは己れが間違つて居たんだ。お前が無理な賴みを聞いて呉れなくてもいゝ時が來たらきつと迎ひにゆく、己れだつて位牌になつた親父にまで優しくしろとは言やしねえんだから。

おつな　そんな事言はないで豐さん。決してもう手は出さないよ。もし出したら七生まで緣を切られても言分は無い。もしも右の手でお父さんの身體へ觸つたら、左の手であたしは死んで見せるよ。決して嘘は言はないから、ねえ豐さん。

豐之助　駄目だ。今更そんな事を言つてももう遲いのだ。なぜ、今詫まると言ふ心をあの時に出して呉れなかつたのだ。お前はあの時己れが泣いて賴んでも、親父を突いたその手を疊へ衝いてはくれなかつたぢやねえか。己れは好い、己れは夫でも好い。お前が惡い事をしたと思つてる事を知つてるから夫でも好いけれ共。親父に怪我をさせるやうな女を、幾ら己れが好きだからと言つて家に置いとく事が出來るか。夫でなくてさへ鵜の目鷹の目の兄弟の耳に、もしそんな事でも這入つて見ねえ。威張つて親父を引とつて來た己れの男が何處で立つんだ。

おつな　いゝえ。詫まる、詫まる。きつとかう手をついて詫まる。

（おつな口惜しげに地へ手をつく。）

豐之助　もう遲い。

おつな　豐さん。

（行かむとする豐之助におつな縋りつく。）

おつな　お前さんは如何してさう氣が强くなつてしまつたんだい？

（泣く。）

豐之助　如何してなつたのだか考へて見ろ、己れはもうお前に何度騙されて居るんだ。

その度に己らは親父には苦勞をかけ、兄弟にやア笑はれて居るんだ。夫でも今迄は我慢もして居たんだ。兄貴も姉さんも夫は親父を酷い目に合した。けれ共まだ一度だつて親父の身體に手を出した事は無いのだよ。立派に世話をすると言つて引取つた己れの女房が、親父の身體に疵をつけても己れに氣に入つた女房だからと言つてお前を家へ置いて、己れは何處へ向いて己れの頭を上げる處があるんだ。己れは強くなり度い。さうしてお前を押へつけてやりたいと思つてゐるのだ。お前の氣を荒くしたが己れなら、己れをこんなに強くしたのもお前だ、己達はお互になり度くもない身の上になつてるんだ。親父を無事に見送つてしまはねえ中は如何しても己れはお前と一處になる事は出來ねえ。

（おつな、屹度頭を上げて帶の剃刀を握み、走り出さんとす。）

豐之助　お前血相を變へて、何處へ行くんだ。刃物なんか持ちやがつて。

おつな　お父さんさへ居なけりや二人は一處に居られるんだもの。

豐之助　（ひしと捕へて）手前は氣でもふれたのか。

おつな　あゝ氣もふれる、鬼にもなる、あたしはもうお前の家を三度も出て居るぢやないか。その度んびに家の母親やお父さんはもう〳〵勝手な事ばかりいふぢやないか。夫でも私はお前さんのお父さんと睨めくらしてるよりは我慢も出來たんだよ。でももう三度にもなつちや、だれもなんとも言つちや呉れないのだ。あたしやアもう家にも居られなくなつてしまつたんだよ。もうどうせお前さんが置いてくれなきや死んでしまふあたしだ。お父さんを殺してゞも好い、一日でも一時間でもお前さんと元のやうに二人きり暮らしてからあたしは死ぬ。男に捨てられたみぢめな女で死たくはないのだよ。

豐之助　人を殺して手前一分でも安隱に暮せると思つて居るのか。

おつな　？　……

豐之助　たとへ、夫が知れないにした處が、親を殺した女と一秒でも己れが一處に住めると思ふのか。

おつな　あゝ……

豐之助　放せ、人が來ると惡い。之を放せ。

（豐之助剃刀を取らんとすれどもおつな必死となつて離さず、ぢつと豐之助の顔を見詰む。遠くにみこしを揉む聲す。）

豐之助　如何したんだ。氣を落つけてくんねえ。如何とも話をつけるから、な、おつな、人聲がする、おい放さねえか。

（だん〳〵に人聲近くなる。）

豐之助　おい。みこしが來るんだ。危ないから放せ。人が見る。

（おつな瞬きもせず豐之助を見詰む。）

おつな　豐さん。

豐之助　なんだ。

おつな　二人でお父さんの居ない處へ行かう。

豐之助　え？

（おつな突然豐之助を抱へて脇腹をさす。二人で重なりて倒る。一段近くなりたるみこしの聲、再び遠くなる。二人半ば起き上る。）

おつな　豐さん、勘忍しておくれ。

（おつな、豐之助を抱きたるまゝ乳の下を貫く。みこしの聲やゝ遠くなる。）

――静かに　幕　――

底本　日本戯曲全集　現代篇　第４輯
出版者　春陽堂
出版年月日　昭和４